

### 3 明治初め

外国人居留地が山手にも広がった

### 1 開港直前

横に長く伸びた砂州から「横浜」と名付けられたとも言われる

### 4 明治半ば

横浜公園は「彼我公園」と呼ばれ、彼（外国人）と我（日本人）の双方が使える公園だった  
(参考・野毛山公園展望台)

### 2 開港後

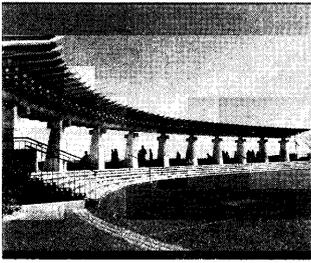
「運上所」が現在の県庁の場所に置かれた

**3代目横浜駅**  
(参考・桜木町駅展示)

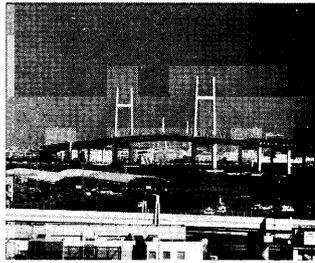
**2代目横浜駅**

**初代横浜駅(横浜停車場)**

## 山手エリア 公開されている建物



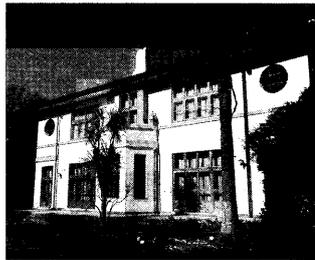
港の見える丘公園の展望台



展望台からの横浜ベイブリッジ



山手 111 番館



横浜市イギリス館



エリスマン邸



外交官の家

野毛「ノゲ」とは地名研究の世界で、「崖」や「突端」をあらわす言葉。

野島の東部には標高約五十七メートルの野島山があり、山頂には展望台が設置されている。

野島の近くには「海の公園」の海岸もあるが、そちらは人工海岸。シーパラダイスで有名な八景島も、海をはさんで相對している。

野島は横浜市金沢区にあり、かつては砂州があつて陸続きだったが、水路が建設されたことで現在は島になっている。もっとも、帰帆橋、野島橋、夕照ゆうしょう橋の三本の橋でつながっており、交通の不便な離島というわけではない。

...

野島はまた、日本の初代内閣総理大臣・伊藤博文が愛した土地としても知られている。明治三十一年（一八九八）、野島に別邸を建てた伊藤は、皇族や政府高官を招き、絶景を楽しませたそうだ。

来訪者のなかには大正天皇や、のちの昭和天皇となる皇太子裕仁親王もふくまれていたと記録にある。

野島公園の松林に囲まれた茅葺きの木造家屋が伊藤博文の旧別荘で、前面の海を一望

できるようになっていた。

ここは、旧伊藤博文金沢別邸として、二〇〇六年に横浜市指定有形文化財に指定されている。

その後、解体・調査を経て、二〇〇九年に創建当時の姿に復元され、現在は見学もできる。別邸の一部には牡丹園があり、人気のスポットとなっている。

ところで、野島のある横浜市金沢区と隣接する横須賀市には、かつて大日本帝国海軍の施設があった。そのルーツは、江戸幕府が慶応元年（一八六六）に建設した横須賀製鉄所までさかのぼる。

明治維新後は新政府がその施設を引き継ぎ、明治四年（一八七一）に帝国海軍所管の「横須賀造船所」となっている。

さらにその後、明治十七年（一八八四）に横須賀鎮守府が設置され、その直轄造船所となり、明治三十六年（一九〇三）、組織が改編され横須賀海軍工廠として生まれ変わった。広島の高橋造船所とともに多くの艦艇を建造した海軍の施設である。

たとえば、明治維新後、初の国産軍艦として建造された「清輝」をはじめ、砲艦の「天城」「愛宕」、巡洋艦の「海門」「天龍」「高雄」「葛城」「武蔵」、戦艦の「薩摩」「河内」「山城」「陸奥」などが建造されている。

そうした背景から、野島山の下には巨大なトンネルがあった。太平洋戦争中、海軍の飛行艇格納庫としてつくられたものだが、使用されないまま終戦を迎えた施設である。ただし現在は、安全上の問題から封鎖されている。

つまり厳密にいうと、この**象の鼻周辺こそが横浜開港の原点**ということになり、実は、あのペリー提督が上陸したのもここであった。

だが、開港したといっても、当時の横浜港は欧米の大型船が港の中に入り込んで接岸できるような水深は持ち合わせていなかった。

そのため、大型船は沖に停泊し、舢舨はしけと呼ばれる小舟がピストン輸送で人や荷物を運ぶかたちで物資のやりとりがおこなわれていたのである。

舢舨は波や風の影響を受けやすかったため、安全性を考慮して東波止場を延長することになった。その際、弓なりに湾曲したかたちにしたことから、誰からともなく、この東波止場は「象の鼻」と呼ばれるようになったのである。要するに、デザイン性を重んじたわけではなく、機能性を求めた結果、採用された形だったというわけだ。

東日本には「**谷戸**」という地名がよく見られる。その名の通り谷間の一種で、小川やゆうすい

湧水が利用できるうえに洪水による被害を受けにくい地形だったので、鎌倉幕府成立以前から開墾が進んだ。しかも、谷戸では周囲の山から燃料や建物の材料となる木材を比較的簡単に手に入れることができたため数多くの入植者が集まり、中世に入ると代表的な里地里山風景がここで見られるようになった。

横浜には丘陵地帯が多かったから、谷戸も無数に存在していた。横浜市によると、か



## 保土ヶ谷の地名の由来

凹地などのように窪んだ場所をあらわすのに「ホト」という言葉がある。じつは、このホトとは、女性の秘所のことでもある。つまり、丘と丘にはさまれた谷間をいったものという考え方がある。

いまでこそ、ビル群が建ち並ぶ保土ヶ谷の街だが、かつては権田坂から見上げれば、そこには、まるで女性の秘所があるかのように見えたのかもしれない。

ちなみに、江戸時代、東海道の宿として栄えたころは「保土ヶ谷」と表記していたそう。さらに、史料によれば、「程ヶ谷」「程谷」などと表記されていたケースもあるようだ。

いまでこそ、「横浜市かなざわ区」であり、京浜急行の駅名も「金沢文庫」となっているが、この地は本来「かねさわ」という名称だった。

横浜の街は、安政六年（一八五九）の開港をきっかけに発展したが、金沢は、それ以前から繁栄していたところである。

源頼朝が鎌倉に幕府を開いたのは元暦（一一八五）とされているが、その鎌倉幕府の「海の玄関口」になったのが金沢の地である。当時は砂鉄の産地でもあり、そこから「金沢かねさわ」の名がつけられた。

だが、「関内」という駅名はあっても、正式な町名としての「関内」はない。行政上の町名でいえば、山下町、日本大通り、本町、尾上町、港町などとなっている。また、「関外」という地名をガイドブックで見かけることもない。

「関内」と呼ばれるエリアは、もともと海だった場所だ。現在、大岡川と中村川とに囲まれているあたりが、かつては入り江で、旧横浜村はその入り江の先の砂洲にあった。現在の「関内」と呼ばれている地域は、吉田新田として埋め立てられ、現在のような陸地になった場所である。

京浜東北線の列車の運行を、1Rでは「上り」「下り」ではなく、「南行」「北行」という呼び方をしている。

日本大通（にほんおおどおり） 防火帯の役割も兼ね備えた通り

横浜三塔を同時に見ることができる場所は3か所。1日で回ると願いが叶う、という「横浜三塔物語」

太平洋戦争が始まると温泉旅館は強制廃業となり、一九四四年には綱島温泉駅は綱島駅に改称された。しかし、終戦後は再び温泉街として復活し、「関東の有馬温泉（兵庫県神戸市。日本三大温泉のひとつ）」といわれるほどの人気となった。東京都心から近いこともあって、接待や慰労に使われ、昭和三十年代には百人以上の芸者がいた。

それほど栄えた綱島温泉が衰退してしまったのは、**新幹線と東名高速道路の開通が理由**だった。これらの便利な高速交通網が手軽に利用できるようになると、東京や横浜の人たちは熱海や箱根、伊豆といった自然豊かな温泉地を目指すようになり、綱島温泉は素通りされることになった。そして、次々に廃業していった。